佐土原教会 2021年8月15日 礼拝説教
聖書箇所：ヨハネ福音書21章20～25節
説 教 題：置かれたところで

シスターの渡辺和子さんが「置かれた場所で咲きなさい」という本を書いておられます。その本の第1話がこのタイトルについての話です。彼女が若くして大学の学長になり、苦労し、悩んでいた時に、1人の宣教師が彼女に渡してくれた詩の冒頭の一行、それが「置かれた場所で咲きなさい」という言葉だったそうです。詳しくご紹介は出来ませんが、結論として書いておられたのは「置かれたところが辛い立場ということもあるけれど、そんな日も咲く心を持ち続けましょう…そのようにして咲く心を持って過ごした日々を神様に捧げましょう」ということでした。

今日の説教のタイトルは、この言葉から取りました。と言うのも、信仰生活にも示唆を与える言葉ですし、今日の聖書のメッセージにも大いに関係があると思ったからです。この箇所は「ヨハネ福音書」の最後の箇所ですが、ヨハネは2000年後を生きる私達に、最後に何を語るのでしょうか。

前回の19節でも、イエス様は最後に「わたしに従いなさい」(19)と言われました。今日の22節でも「あなたは、わたしに従いなさい」(22)と繰り返して言っておられます。「ヨハネ福音書」でイエス様が最後に言われたのは「あなたは、わたしに従いなさい」(22)という言葉でした。そのことはつまりイエス様は、「福音書」を読む私達にも「あなたは、わたしに従いなさい」と呼びかけておられるということです。前回、私達は「あなたはわたしを愛しますか」(17)という問いかけを受けました。私達はイエス様を愛する信仰生活を送りたいと願います。しかし信仰とはまた「あなたは、わたしに従いなさい」(22)という言葉に応答することでもあるのです。では、私達がイエス様に従う信仰生活を造るためには、何が、どのような思いが、大切なのでしょうか。2つのことを申し上げます。

1：自分の道で主に従う

20節に「ペテロは振り向いて、イエスが愛された弟子があとについて来るのを見た…」(20)とあります。前の箇所でイエス様はペテロに「あなたは、わたしの教会の牧者として教会を導いて、最後は十字架にかかって使命を全うするのだよ」と言われました。その2人の一番近くにいたのがヨハネでした。ペテロにとってヨハネは、何かにつけて気になる、知らず、知らず、自分と比べてしまう、そういう存在だったのかも知れません。それでペテロは、ヨハネを指して「主よ。この人はどうですか」(21)と聞くのです。これはどういう言葉でしょうか。

宗教改革者カルバンは「これはペテロの中にある好奇心の言葉だ」と言っているようです。私達の中にも「他の人はどうなのか」と知りたがる好奇心があります。学校に勤めている時、特に異動の時期、根ほり葉ほり人のことを知りたがる先生がいました。私はそこで「根ほり葉ほり」という言葉を覚えました。しかし他人事ではない、私達の中にも、この好奇心があるのではないでしょうか。そして、自分より幸せな人がいたり、祝福に与っている人がいたりすると、「なぜあの人なのか、自分じゃないのか」と思うのです。人が不幸そうだと、自分と比べて喜ぶのです。つまりそれは「自分と比べるために人のことを知りたがる好奇心」です。ペテロにしてみれば、自分は死を預言されているのです。「なぜ私は死ぬのか、あの人はどうなのか」、そういう思いは当然だろうと思います。

しかしイエス様はペテロに「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい」(22)と言われたのです。言い換えれば「ヨハネがどのような奉仕をして、どのような死に方をしようが、それであなたの何

が変わるのか。あなたはわたしに従いなさい」ということです。何を語ろうとしておられるのでしょうか。それは「キリスト者にはそれぞれに、主に従うそれぞれの道がある」ということではないでしょうか。

ペテロは牧会者として大きな働きをしました。しかしヨハネはそうではなかったのです。ヨハネの仕事は、長く生きて、「ヨハネの福音書」、「ヨハネの手紙」、「ヨハネの黙示録」を書いて、様々な間違った教えに対して、イエス様の正しい教えを守り、それを伝えることでした。どちらが良い、悪いということではないのです。それぞれ与えられた道が違うのです。

それはこうも言えます。イエス様はこの言葉によって、ペテロを「自分と比べるために人のことをあれこれ知りたがる好奇心」という罪から解放しようとしていらっしゃるのではないでしょうか。そうでなければ、本当の意味でイエス様に従い抜くことは出来ないからです。神学校の先生がチャペルで話された言葉を覚えています。「私達は良く人と比べてしまいますが、人と比べると、出て来るのは優越感か、劣等感のどちらかです」。渡辺和子さんは言っています。「比較を常にしてしまいがちの人は、劣等感の塊、また優越感の塊になりがちです」。どちらもイエス様に従うには不必要なものです。その意味でイエス様の言葉はまた、こうも言い換えることが出来ます。「人のことに構うな、人がどのように歩もうとも、それがあなたにとって何の関係があるか、あなたは、わたしとあなたとの関係だけにおいてわたしに従って来なさい」。ある意味で「人に対して無関心で良い」と言われるのです。自分と主との関係だけで主に従う、その道が教えられているのです。私達はイエス様だけを見れば良いのです。そして自分の置かれたところで咲こうとすれば良いのです。

それを日常の生活に置き換えると、例えば「コロサイ書」に「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい」(コロサイ 3:23)とあります。主に遣わされた生活の場、仕事の場に赴き、そこで出会う人々に、主に対するように接して行く、仕えて行く。他の人のことで惑わされなく良いのです。

「瞬きの詩人」と言われた水野源三という方がおられます。脳性麻痺で小学校 4 年生にして手足の自由と言葉の自由を奪われ、生涯、瞬きしか出来なかった方です。厳しい状況です。でも水野さんは、瞬きを使って神を讃美する沢山の詩を書きました。与えられた状況の中で精一杯、神に従って生きたのです。あるテレビ番組で、水野さんを 1 人の少年が訪ねました。彼は最近、突然左目の視力を失い、右目もいつ見えなくなるか分からないという不安と恐れの中にある少年でした。彼が水野さんのことを聞いて、ぜひ会いたいと言って訪ねて来たのです。水野さんは少年を暖かく見つめ、最後に瞬きでこう語りかけるのです。「他の人と比べないようにして生きて行って下さい」。それは「あなたには、あなただけに与えられた生きる道があるし、そこに神の恵みはきっとあるのだよ」、そういう思いのこもった言葉だと思います。それは、水野さんの生き方、ご生涯、そのものだったのではないでしょうか。

そして、それはそのまま、この箇所の語る信仰生活への勧めとして聞くことが出来るのではないでしょうか。「あなたには、神様があなたに与えた道が、イエス様への従い方があるのだ。他の人のことは見なくて良い。ただイエス様を見上げて、イエス様に従って行きなさい。その道で、神の恵みをきっと経験するはずだ」。森繁さんが神様からこんな語りかけを聞いたと証ししています。「神の下さる仕事に大小はない。この人は偉大なことをしたけど、この人はそうではない…ということはない。それぞれが神様から丁度良い仕事をもらって、そこで心から神に従って行く時、褒美は同じだけもらうのだ」。私達は、置かれたところ、それぞれ自分の道で、イエス様との関係だけにおい

て、精一杯、主に―(主の御言葉に)―従って生きて行きたいと思うのです。

2：主によりかかりつつ主に従う

「置かれたところで主に従って生きる」、その時に大切なことがあります。ここでヨハネは自分のことを「この弟子はあの晩餐のとき、イエスの右側にいて、『主よ。あなたを裏切る者はだれですか』と言ったものである」(20)と言っています。「新共同訳」は「イエスの胸もとに寄りかかったまま」(20 新共同訳)と訳しています。その方が原文に忠実です。ヨハネが言いたいのは「私はイエス様の胸によりかかっていた者である」ということです。

「イエス様の胸によりかかる」とは、どういう意味でしょうか。「最後の晩餐」の時、ヨハネはイエス様に背中を向けるようにしてよりかかっていました。つまりヨハネは、イエス様によりかかっていましたが、イエス様の姿は見えなかったのです。同じ様に「イエスの胸によりかかる」とは、見えないイエス様に自らを預ける、イエス様が傍らにおられて、私のことを、その試練も全部知っておられ、共に歩き、支えていて下さる、ということを前提にして生きて行くことだと思うのです。

アメリカで 1 人の高校生が、理科の実験で薬品が爆発して、目が見えなくなりました。彼は絶望して自分の部屋に引きこもっていました。その地域は寒い地域なので、冬は二重窓にしなければなりませんでした。ある日、父親が部屋にやって来て言いました。「お前の部屋の窓を二重窓にする材料はガレージに全部揃えたから、自分で二重窓にしなさい」。彼は言いました。「目の見えない僕にそんなことが出来るはずがない」。「そうだ、梯子から落ちて体を打ちつけて、動けない体になって、そうやって家族に仕返しをしてやる」。彼は、そうやって一日中作業をしたのです。しかし、そうしたら全部窓が入ったのです。彼は大きな一歩を踏み出したのです。後で分かったことですが、その日一日中、彼の父親は、彼の傍に、手を伸ばせば届くところにいて、彼が落ちないように一緒に回ってくれていたのです。彼には見えなかった。でも父親は傍らにいたのです。

私達にも、イエス様の御手は見えないのです。だから信仰生活の中で主への信頼に生きることが出来ないことがあるのです。そして困難があると神様に呟くのです。しかし、イエス様に従って行く、その時に大切なことは、イエス様が共におられることを信じ、共におられるイエス様に信頼することではないでしょうか。そのような信頼に生きることが「イエスの胸によりかかる」ことではないでしょうか。見えなくても主の手は添えられているのです。それを信じて生きるのです。

森繁さんの証しです。何度かご紹介していますが…。ペテロは、やがて殉教の死を遂げます。ペテロが逆さ十字架に架かって殉教した場所に、今のバチカンのサン・ピエトロ大寺院は建てられていると言われます。そのように、自分の道でイエス様に従い通し、ついに殉教の栄誉に与るのですが、日本人クリスチャンである私達も殉教者を持っています。森繁さんは、佐渡島に行き、そこで「切支丹塚」という碑を見ました。江戸時代の初め、そこで切支丹達が信仰のために首を切られ、見せしめのために曝された、という場所です。彼は考えるのです。「自分がこの時代に生きていたら、自分も信仰のために、信仰を守って殉教することが出来ただろうか。それとも信仰を捨ててしまっただろうか」。その時に神様の声を聞くのです。「わたしはお前をあの時に生まれさせていない。今この時代に生まれさせたのだ」。彼は思いました。「それでは不公正ではないですか。あの時代の人は命をかけました。私は命をかけていません」。そうしたら、また神様の声がありました。「わたしに従って来るのはあの時も今も同じだけ難しいのだ。わたしに信頼する人だけが出来るのだよ」。彼は「普段の信仰生活の中で、自分がいかに、主に信頼し、主に喜ばれる生き方をすることを疎かにし

ているか」、それを考えさせられるのです。
　私達も、嬉しいこと、辛いこと、悩むこと、不安なこと、色々なことのある、その普段の生活の中で、主に信頼し、主に身を預け、そのようにして、自分の道で主に従って行きたいと願うのです。

3：最後に

　ヨハネは「福音書」の最後に書きました。「イエスが行なわれたことは、ほかにもたくさんあるが、もしそれらをいちいち書きしるすなら、世界も、書かれた書物を入れることができまい、と私は思う」(25)。ちょっと大げさな感じがしないでもありません。ユダヤ的な誇張表現かも知れません。しかし、私はこう思うのです。確かに「イエスの行われたこと」には、ここに記されていない多くのことがあったはずです。しかし「イエスが行われたことは…たくさんある」(25)という言葉は、それ以上のことを意味していると思うのです。イエス様は、聖霊なる神様として私達と共におられるのです。私達の人生のそれぞれの場面において、イエスは生きて働いて下さり、色々な出来事を与え、出会いを与え、私達を神様の豊かな救いへと導いて下さっています。これまで私達がイエス様について知っていることは、ほんの一部です。私達は、これからもイエス様を経験するのです。そしてこの言葉は、「これからあなたがたが経験するイエス様の物語は、書き始めればきりがないのだよ」と、私達がこれからイエス様に従って生きる、その中で私達は、豊かなイエス様の御業を経験して行くのだ、ということを示唆しているのではないでしょうか。私達は「あなたは、わたしに従いなさい」(22)と呼びかけられています。その召しをしっかりと受け止めて、それぞれ置かれている状況の中で、主に従う信仰の生活を造って行きたいと願います。